

Medi-Way 医療通訳者紹介 Vol.8 スペイン語担当 伊東さん

◆なぜ医療通訳者になった？

私の地元は外国人定住者が全国の中でも多く、行政はいち早く医療通訳者養成に乗り出しました。その企画に応募し、医療通訳者として認定されて活動するようになりました。身に付けた言語を生かし続けたいというのが動機でしたが、外国人患者や対応する医療従事者の皆さんのリアルな現場を経験して、その必要性を改めて実感しました。以後、専門知識の勉強と実践を積み重ねています。



◆今まで医療通訳に携わってきて一番嬉しかったことは？

命に関わる病気の子どものその母親に継続して対応したときのことです。「子どもの病気が自分の落ち度ではなかったか、検査結果や治療の詳細などこれまで質問できなかったことがたくさんあった。今は何でも聞ける。言葉が通じるあなたも一緒に闘ってくれたから頑張れた。」と言われたことです。そして子どもの退院が決まったときのお二人の笑顔は忘れられません。

◆より良い通訳をするために心掛けていることは？

自分や家族が実際に診察・検査を受けた時のやりとりをバーチャル通訳して演習しています。やってみると専門用語より日本語独特な言い回しが結構難しく、例えば『～という可能性も無きにしも非ず』『どちらかと言えば～ということになる』などという表現は、その都度より伝わりやすい通訳を考え、メモしていくようにしています。また、自分の心身の健康管理のため毎日の水泳は欠かせません。

通訳コーディネーターってどんな仕事？

「コーディネーターって何をしているの？」とよく聞かれますが、ひと言で言えば「なんでも屋さん」です。「通訳センターってコールセンターのような感じ？」というイメージもあるようですが、むしろ一般的なオフィスで「通訳だけ」ではなく、通訳にまつわる業務が幅広く行われています。

コーディネーターは主に事務を担当しています。通訳者の報告書をもとにお客さまへお送りするマンスリーレポートを作成したり、勤務シフトを含めた勤怠管理、翻訳のレイアウト、月例の勉強会の準備など。また、遠隔通訳で使用する機器の確認やサポートも欠かせません。その他のトラブル対応、時には通訳者の何でも相談も承ります。

対外的な窓口でもあるので、メールのやり取りなどであっという間に時間が飛んでいきます。パソコンの前で眉間にしわを寄せながら（怒ってはいません）全力疾走です。

この Medi-Way 医療通訳だよりは、通訳者とコミュニケーションを取りながら素材を引き出し作成しています。お客さまから「読んでよ！」と温かい反応をいただいた時には、疲れが一気に解消されます。そして、コーディネーターを普段から支えてくれている通訳者やセンター長にお菓子を配ってまわるのも大事な役割。こればかりは一番心躍るお仕事かも、です😊 ドラマの中の主人公のように「飒爽に」とはいきませんが、皆さんの架け橋となれるよう、これからもがんばります。

今月のトピックス



「研修生の受け入れ」



東和通訳センターでは、複数の大学と協力させていただき、医療通訳養成講座で学ぶ方たちに現場研修の場を提供しています。研修生の皆さんは語学に関してはもちろん優秀な方ばかりですが、ビデオや電話を使った遠隔通訳となるとほとんどの方が未経験。センターでヘッドセットをつけて画面に向かい、私たちが医師や患者役になってロールプレイングを行うのですが、後でビデオを見直すと「緊張のあまり白目むいてる！」と顔を赤くした方や、メモ取りに一生懸命で「つむじしか映ってない…」としょんぼりされる方などいろいろです。それでも2回目となると、私たちのアドバイスを活かして堂々と通訳される方がほとんどです。受け入れる側の私たちも、初めて遠隔通訳した時の自分のビデオを見たら、「体を揺らしている」「姿勢が悪い」等々たくさんの反省点がありました。研修生の皆さんに、そんな自分の体験を織り交ぜながら医療通訳のあれこれをお話するのは、とても有意義な時間です。

ネイティブの研修生の方の日本語（時には大阪弁！）がとてもお上手でびっくりしたり、学習に役立つ本やサイトの紹介をしていたら、逆に「このペン、メモ取りにすごくいいですよ。」と教えてもらったり、まさに一期一会の楽しさと、あらためて初心に帰る良い機会を頂いています。3月は卒業の季節、研修生の皆さんの今後のご健闘と、同じ通訳者同士、これからも高め合っていけたらと願っています。

